

「国立台湾大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学法学部・2回 平岡由理

1 学習成果

私は本プログラム参加以前に海外留学の経験がなく、特に大きな目標も持つことはないままに学部で2年間過ごしてきた。そんな積極性に欠ける学生生活を変えたいという、漠然とした思いが、プログラムに申し込んだ最初の理由だった。第二外国語でフランス語を選択していたが、中国語もやりたいと思っていたことなども動機になった。

国際交流には興味はあるものの、私個人はそこまで確固たる目的意識のないまま本プログラムに参加したが、同じプログラムに参加している学生らは海外経験が豊富で、国際交流とは何か、何のために国際交流をするのかといった視点が確立しており、そのような仲間とともに3週間過ごすという経験からは大変な刺激を受けた。

具体的には、これまで法学という学問は座学的暗記的要素がつよく、海外交流の類とは(少なくとも学部レベルでは知識の実践段階まで辿り着かないという意味で)あまり関係がないと考えていたが、そのような認識を改めることとなった。

例えば二重国籍や日本人への帰化の問題、外国人選挙権など、法学をやる者なら必ず判例など1度は聞きかじったことのある分野だが、実際にそのような問題の当事者と本プログラム中に関わる機会が数多くあった。その中で、これまで「判例」の「知識」として自分の存在からは遠いものとして暗記していた問題に、当事者として携わっている人には、自分と全く年代で「普通の」友達、自分から遠くはない存在もあることを実感できた。判例に登場する人物の心情は想像することしかできなかったが(また、今から思えばそれほど想像を働かせていたことも無かったが)、実際に当事者と話すことで、抽象的な法律問題が自分の身に迫ったこととして感じられた。これは実際に海外に出てみる、あるいは海外で友達を作るという経験が無ければ得られなかった感覚であると思う。

2 海外での経験

自分の専門と絡めての実感を上記のものであったが、留学といっても3週間という短い期間で、特に「これを得た！」と声高に主張するのは躊躇われるが、私個人としては、「得た」のではなく、逆に「自分に足りない部分を突きつけられた、認識できた」部分が多かった。そしてそれこそがこの3週間で「得た」ものではないかと思う。

日本の最高レベルの大学入試で培って自信があった英語力も、ネイティブスピーカーやセカンドランゲージスピーカーと話す時には、日時会話や砕けた会話が全く出来ない程度だったこと。単語だけ覚えても、自分の話す中国語の発音が通じなくてショックを受けたこと。語学力があってもコミュニケーションは別の問題だということ(語学力があっても外国人の相手に興味が無いと思っている人は相手にも当然それが通じるし、逆に語学力が弱くても相手と話したい、伝えたいと思っている人にはそれが通じる)。ニュース程度でしか知らなかった台湾と中国の関係と、それに対する現地の人々の感覚。日本人が国政についていかに「控えめ」であるのか。そういったことに客観的に気づけたこと、自分の足りない部分に気づけたからこそ、これからはそういう部分を埋めていこうと思える。国内で過ごしているだけではそういう足りない部分に気づけなかった。日本では名前だけでチャホヤされる大学の学生をやっているが、海外に出れば、同じレベルの学生と対等に渡り合うことなんて到底難しい自分の存在を痛感した。教養の何たるか、を身をもって感じた3週間であった。

3 プログラム内容

中国語の授業(初級)、英語での台湾文化の講義、現地大学生や他大留学生との交流を経験した。単なるプログラム内容以上に、外国人の友達が出来たこと、海外的な視野を持つ友達と3週間一緒に暮らして、硬い話から馬鹿な話まで一緒に出来たことが、自分の考え方に大きく影響を与えた。

4 進路への影響

海外で過ごす3週間の短さを痛感した今回のプログラムだった。今後は是非長期留学したいと思う。ただやみくもに行って、行くだけで満足するのではなく、きちんと語学面や歴史的知識などを学んだ後で渡航したい。